**説教20230820ローマ11：28-32マタイ15：21-28「大きな信仰」**

**「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」このようにイエス様はこの婦人にお応えになって、その後、悪霊に取り付かれていた娘の病気は、癒されました。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」この御言葉は、今日の聖句として週報に記しておきましたが、「あなたの信仰は立派だ。」の立派と言う語は、ややもすると、誤解を招きかねませんので、少しご説明したいと思います。新しい聖書協会共同訳聖書では、この個所の直訳として「あなたの信仰は大きい。」と記されています。大きいの元のギリシャ語はメガレーと言いまして、これは今でもよく使いますメガ、めちゃくちゃでかいという語と同じ語幹であります。**

**イエス様は、この時、婦人よ、あなたの信仰はめっちゃ大きいですよ。とその時の彼女の信仰の状態を述べたのでした。それは確かに一つの誉め言葉ではありますが、むしろそれ以上の事をイエス様は言いたかったのだと思います。**

**このメガレー、大きいという形容詞は、先週語られましたガリラヤ湖で、人々が大きな嵐に遭遇する時に用いられている、大きいという形容詞と同じ語です。それは人には制御できず、人の力をはるかに超えた大きな嵐。大嵐です。この様な大きいに含まれている語感を味わっていきますと、イエス様がこのとき、「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。大きい」と言って、彼女の信仰をほめたのは、その信仰が、人々から誉められるような誰が見ても模範的ないわゆるご立派な信仰であったからではないことが判ります。そうではなくて、この時の彼女の信仰はあまりに大きくて、人の手では制御できないような、むしろ人の目からは理解しつくせないような、主イエスから与えられたあまりに大きな信仰だったからでした。**

**聖書では、信仰・希望・愛という様に、この三つを連ねて語ることがよくあります。この三つはとても大切なことですが、信仰・希望・愛を、私たち人間一人一人に与えて下さるのはイエス様です。イエス様抜きにして、人間だけでいくら頑張って熱心に努力しても、聖書が語る信仰・希望・愛を、人間が作り出したり、手に入れたりすることは出来ないのです。そして、この時、この婦人に信仰を与え、その信仰を大きくして下さったのも、他ならぬイエス様御自身なのでした。**

**ちなみに、先週ガリラヤ湖の上で沈みかけて「主よ、助けてください」と叫んだペトロに対して、イエス様が手を伸ばして助けた時にイエス様は「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」とペトロに言われましたが、これを直訳で表現しますと、「信仰の小さい者よ、なぜ疑ったのか」となります。イエス様は、この時のペトロの信仰は小さく、今日の婦人の信仰は大きいという様に、その各人の信仰の状態を較べられているのです。私たちの信仰は、この様に、生活の場面場面でイエス様によって、大きくもされ又、小さくもされるという、まことにイエス様次第なのであります。**

**では今日の聖書箇所を見て参りましょう。マタイ福音書１５章２１節**

**イエスはそこをたち、ティルスとシドンの地方に行かれた。**

**イエス様は、ガリラヤ湖があるイスラエル地方を後にして、その北西に位置するティルス・シドン地方へと行かれました。ここでイエス様と弟子たちがいる場面は大きく変わっているのです。イエス様たちは異邦人の住む地方へ行かれたのでした。ここに記されていますティルス・シドン、そしてカナンと言う地名は、聖書において、異邦人と言われる人々を思い起こさせる象徴的な地名です。異邦人と言うのは元々、神の民を自認していたイスラエルの民以外の民、と言う意味であります。今日では、イエス様によって、異邦人、イスラエルの民という区分ではなくて、イエス様を信じる者たちが神の民とされるのですが、今日の聖書箇所を読むにあたっては、当時の異邦人、イスラエルの民と言う区分を頭に置いて読む必要があります。**

**イエス様はティルス・シドン地方で、異邦人であるこのカナンの女と出会ったのでした。彼女はイエス様に「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫びながらすがりついて来ます。イエス様はなんでもお見通しの方ですからこの婦人と出会った瞬間に、彼女の内にある大きな信仰を見抜いて、最初から「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」とお応えになることも出来たのではないでしょうか。しかしイエス様はそうはされませんでした。この有難い御言葉を語る前にイエス様は、一見冷たいと思われるような御言葉を投げかけられます。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」**

**これらのイエス様の御言葉は、先ほど申し上げました、当時の異邦人、イスラエルの民と言う区分を頭に置けば、その時代の場面の中でイエス様が語られ、会話をされたのだということが判るでしょう。弟子たちはこの婦人のことでイエス様に向かって次の様に言いました。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」この弟子たちの発言も、その場面から切り離して、これだけを切り取って考えれば、ずいぶんと冷酷な発言だと思われますが、実は、当時におきましては、異邦人に対しては神様は相手にしないのだと考えることの方が普通であったと思われます。つまり異邦人はイエス様の救いの対象ではないという、社会的な通念があったのです。**

**この人間が懐いています社会的な通念と言うのは、その時代時代で、これも又大きな力を持って人間を縛り付けているものです。今の私たちが生きるこの時代を見て観ましても、一歩教会から出て、この日本の街に身を置けば、とてもとても大事なイエス様の信仰・希望・愛は、一体何処に在るのでしょうという状態で、多くの人々が「イエス様の救いは、今の日本に暮らす私たちには向けられていません、わたしには無関係です」と語る社会的な通念が大勢を占めているのです。**

**このようにイエス様を信じる神の民と異邦人との区分と言う問題は、今の世の中でも、実は私たち人間の中心的な課題なのです。**

**この婦人の娘は悪霊に取り付かれていました。私たちは、今この様にして、聖なる霊、聖霊によって満たされ守られていますけれども、ちまたには悪霊が満ち溢れています。**

**今や、悪霊は、家庭にも入り込み、人々を反目させ、敵対させ、孤独にしようと働いています。そして家庭ばかりではなく、一人の人間のうちにも、聖霊の弱くなっているすきに乗じて入り込んで、その人を悪くしようとして、悪霊はすぐそばで働き続けているのです。**

**私たちは悪霊が持っているその大きな力を前に、人間的な戦略や画策がちっとも歯が立たないことを、今、思い知らされているのではないでしょうか。**

**この婦人は、娘が悪霊にひどく苦しんでいるので、自分も悲しみ苦しみそして痛みを覚えていました。そんな彼女がどうしたかと言うと、それはイエス様の処へ行って、ただただイエス様の前にひれ伏して、「主よ、どうかお助けください」とこいねがったのでした。或いは彼女は、こうしてイエス様の御前にひれ伏す前に、直接、この娘と向き合って、色々と娘を励まし、医者にも連れて行き、最善の策を尽くしたかもしれません。しかし、そのような対策では、悪霊による病気がいやされることはなかったのでした。悪霊が娘から出ていく事はなかったのでした。**

**彼女は、そうしてこの世的な対策を諦め、社会的な通念もかなぐり捨てて、イエスさまのもとへとやって来て、その御前にひれ伏したのでした。**

**彼女のイエス様への信仰はこの時、自分は異邦人であるからイエス様は相手にしてくれないだろうと言った社会的な通念をつきぬけて、大きくされていたのでした。**

**さて「主よ、どうかお助けください」というこの婦人のイエス様への祈りは、先週のガリラヤ湖で沈みかけていたペトロの「主よ、助けて下さい」という祈りと同じです。**

**この婦人の祈りは新しい聖書協会共同訳では「主よ、私をお助けください」と訳されていて、ちゃんと私をと言う風に明言されています。この婦人はこの時、イエス様に「主よ、私をお助けください」と祈ったのであります。皆さまこれを聞いて少しおやっと思われるかもしれません。この婦人は、自分の為ではなく、悪霊に付かれた娘の為に執り成し祈っていたのではないかと。**

**このことについて、或る注解書によると、この婦人と娘とは、痛み悲しみを完全に分け合えるくらい一心同体となっていたので、この婦人は我がこととしてこのように祈ることが出来たのだと。そういう見方も出来ますが、もうちょっと現実的な見方をすれば、同居する悪霊に付かれた娘の振舞いに疲れ果てた母親が、最早なすすべもなく、この私をこの状況から救ってくださいと言ってイエス様にすがりついたのだと見ることも出来ます。**

**何れにしましても、この様にイエス様にすがりついて叫ぶこの婦人に、イエス様は大きな信仰を与えて下さって、彼女はイエス様によって救われたのでした。その後に、この娘から悪霊は出て行って娘の病気は癒されたのです。**

**イエス様が与えて下さる大きな信仰は、必ず、悪霊に勝つことが出来ます。この時、娘の病気が癒されたのは、一つの奇跡でありますが、それが起こされたのは、この母親が、イエス様に祈って、彼女自身がイエス様から大きな信仰を頂いて、聖霊に満たされたので、その聖霊の働きによって、悪霊が追い払われたのであります。**

**パウロは、イスラエルの民に属していましたが、イエス様を信じないでいる同胞たちを覚えて「わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。」とその悲痛な思いを述べました。**

**今、イエス様を信じて歩んでいる私たちの日常にも、未だイエス様を信じていない人や悪霊に支配されている隣り人に対して、パウロが懐いたのと同じ悲痛な思いがあることでしょう。或いは、この地上にあってイエスさまを信じて歩んで行くということには、隣り人を思いやって悲痛な思いを抱いていく事が、常にその根底にあることでしょう。**

**それはイエス様ご自身が、世の人全てを憐れんで、十字架上で「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」と言われたことに繋がっています。しかし、最後までイエス様の御言葉を信じ、イエス様と応答する人には、大きな信仰がイエス様から与えられ、その人は、遂には、朽ちない身体によみがえるという、イエス様の大きな奇跡の御業に与ることが出来るのです。**

**私たちは、小犬が主人の食卓から落ちるパンくずを頂いて生きているような、取るに足りない弱い存在であります。しかし弱さを隠さずイエス様にすがりつき、イエス様に憐れみを求めれば、イエス様は、私たち一人一人に大きな信仰を与えて下さいます。この様にして自分自身がイエスさまに救われ、そして隣り人たちも救われていくという、信仰の大きな奇跡の御業に恵まれる、新しい一週間の歩みをイエス様と共に前に進めて参りましょう。**

**祈り**

**父なる神よ、あなたは聖霊で私達を満たし、悪霊から守って下さいます。その大きな恵みに感謝し、あなたを賛美します。**

**大雨や暴風、大火事によって試練のなかに置かれている方々を覚えます。どうかお一人お一人をあなたが癒し慰め、立ち上がらせて下さい。どんな時にも、聖霊によって、とりなし祈り、悪霊を取り除き、御子イエスの復活の命を生きる道へと連れ戻して下さい。**

**「わたしたちには深い悲しみがあり、わたしたちの心には絶え間ない痛みがあります。」しかし、悲しむ者は幸いであると御子イエスは言われました。私たちがやがて入れられる天の国での尽きることがない幸いの時を待ち望みつつ、今ここにある悲しみと幸いを味わっていく事が出来ますように。**

**御子イエスの御言葉に、最後まで応答する人は救われます。私たちが最後まで、隣り人の為に執り成し祈り、大きな信仰、希望、愛のうちに入れられていく事が出来ますように。**

**父と聖霊と共に一体であって**